

第3節 土師質土器の生産・流通形態 一糸切り底の小皿・杯からみた一

1. はじめに

機能分化した建物群と大規模な区画溝で構成される区画1が、13世紀前葉～後葉（末葉を含まない）に存続したことは、第1節を踏まえた第2節の検討で明確にできた。県内で確認された中世前期の居館遺構としては、最も良好でまとまった内容の資料提示が遺構・遺物ともに行えたと考えている。

区画1出土の在地土器の中で、ひときわ注目しておく必要があると認識しているのが、中世II-2～3期に盛行する特徴的な糸切り底の小皿と杯である。既に片桐孝浩氏によって、県内の12～13世紀の供膳具の底部切り離し技法として、ヘラ切りと糸切りの2者があり、前者は普遍的存在であり、後者は三豊平野と高松平野東部でヘラ切りと共に存することが指摘されている（片桐1992）。ところが本遺跡を含めた高松平野南部～東部では、近年の資料の蓄積にもかかわらず糸切り底の供膳具は、むしろ稀な存在であることを指摘できるようになってきた。ことに区画1での特徴的な小皿・杯（皿C II形式・杯E III形式）は、遺跡内においてもかなり偏在的な在り方を示すようである。

ところで、狭域を対象としたかにみえる皿C II形式・杯E III形式の偏在的な在り方は、どのような需給関係を示唆するものであろうか。このことを以下、検討することとした。

2. 糸切り底の小皿・杯の生産技術

(1) 胎土

皿C II形式・杯E III形式は、明褐色～橙色に発色して砂粒を多く含む特徴的な胎土をもつ。土器の色調は焼成技術とも関わるが、ヘラ切り底の杯D II形式にしばしば認められる灰白色ないし黄白色に発色する個体は極めて少ない。したがって、単に焼成雰囲気との関連のみで捉えることもできず、胎土中に含まれる化学的成分（例えば鉄の含有量）を主要因とするとみた方がよいかもしれない。

特徴的な砂粒としては、砂岩粒がある。5 mm大ないしそれ以上のかなり大きな小石状の砂粒が含まれるものもあり、角礫の状態ではなく摩滅の進行した円礫に近い状態での混入が認められる。したがって山手の一次粘土ではなく、河川の下流域の平野部の二次粘土とみられる。また石英・長石の混入が顕著であり、ヘラ切り底の小皿・杯よりも夾雜物の多い、粗質な粘土によって製作されていることがわかる。

今回、皿C II形式と杯E III形式も胎土分析の対象とした（第4章第2節参照）。K₂O-CaO散布図（第396図）とSr-Rb散布図（第397図）からは、一応明瞭なまとまりを指摘できたが、西村遺跡の散布範囲とかなり重複するという問題点が残る。しかし肉眼観察によれば、砂岩粒の混入状況や胎土の発色状況など、かなり異質な要素があり、両者の識別は可能である。発色の要因の可能性がある鉄分（Fe₂O₃）の分析が今後必要となろう。

同様な胎土の小皿・杯は、六条・上所遺跡S B 03柱穴、東山崎・水田遺跡E区第1面S D 03、前田東・中村遺跡S X 04など、高松平野南部から東部にかけての地域の基準資料中には見出すことができない。また、中世II-1期に位置付けられるS D fl6下層出土遺物には、同時期のヘラ切り底と同形

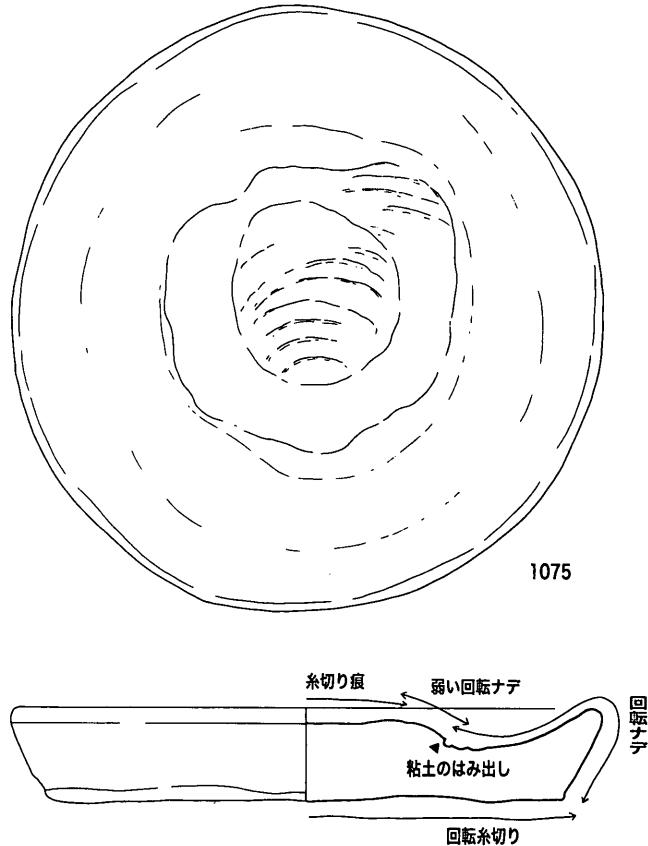
態の糸切り小皿（260～265）があるが、これらは胎土がヘラ切り底と共に通しており、皿C II形式・杯E III形式の胎土とは明確に異なる。したがって管見の限りでは、中世II-2・3期の空港跡地遺跡に特有な胎土ということができる。採掘地については不明だが、周辺遺跡では出土がほぼ皆無であることを踏まえると、空港跡地直近の可能性がある。胎土中に含まれる砂岩粒の混入状況も、香東川扇状地の末端である当該地域であれば矛盾しない。

(2) 小皿の製作技法

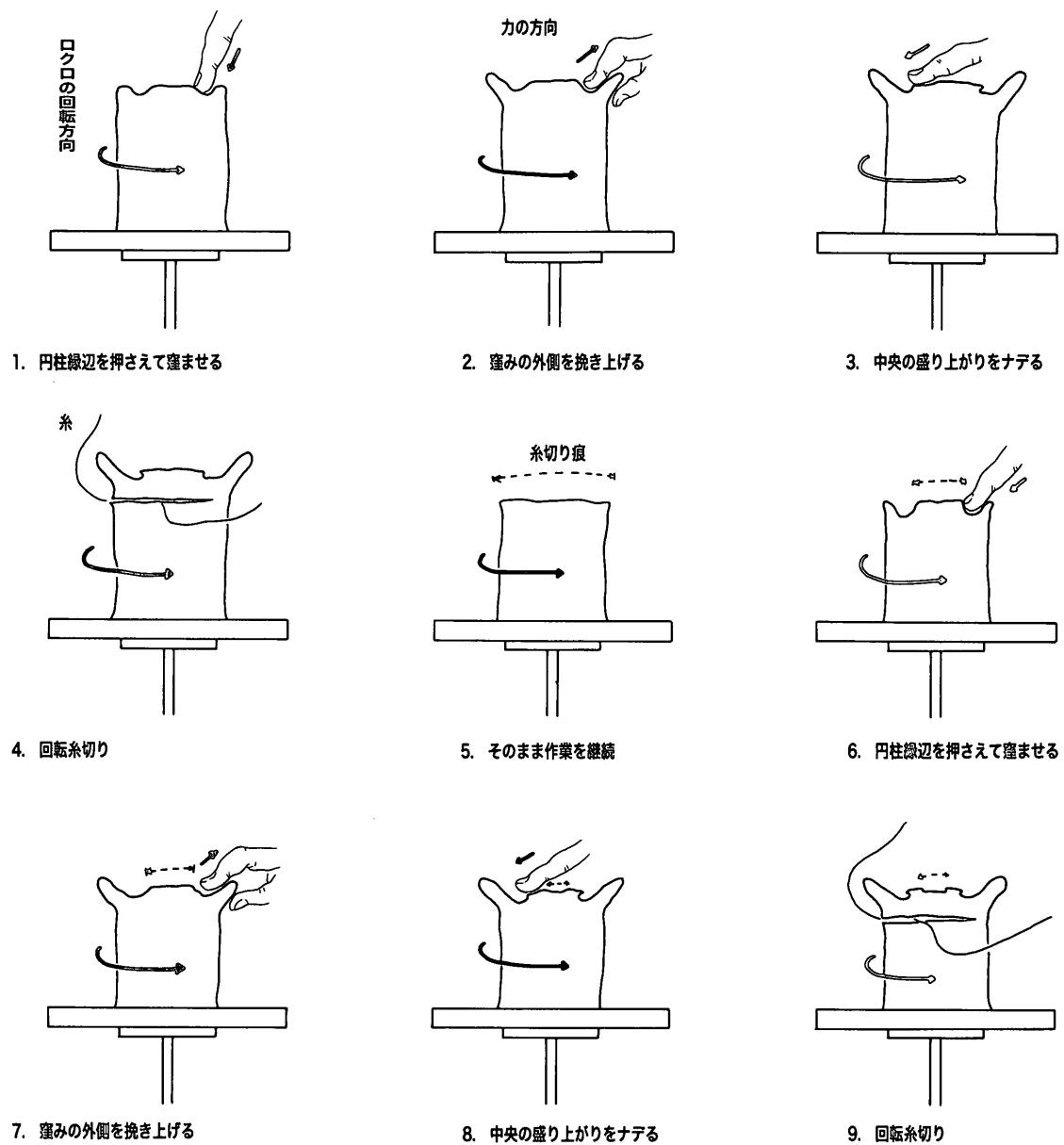
成形・調整痕の特徴 器面の遺存状態が良好で調整痕が明瞭なS T f02出土資料（1068～1075）を検討対象とする。形態的な特徴として指摘できるのは、次の3点である。①口縁部は端部が細身で基部（下半部）が厚味のある形態であり、断面三角形を呈する。②見込みが平坦に窪むものが一定量存在するが、見込みが断面台形状を呈し、口縁端部付近まで盛り上がるものも多い。③見込みが盛り上がる場合は、例外なく口縁部内面下半から底部内面外縁が相対的に窪む。

器面の技法痕跡は、この形態的な特徴と密接な対応関係にある。既述したように、1075では口縁部外面から内面にわたって認められる回転ナデが、口縁部内面→見込み周縁部という先後関係を伴っていることを確認できる。見込み周縁部のナデによって生じた粘土のはみ出しが、口縁部内面のナデを覆っているため、両者は断続的に施されたナデ調整であるといえる。なお、回転ナデ調整によって生じたロクロ目の状態を観察すると、口縁部ナデの方が直線的で強く施されているようにみえ、見込みのナデは低速で弱く付されたように見える。また見込み中央部には糸切り痕が認められるが、見込み周縁部はナデによって消去されている（第451図）。見込みの糸切り痕と口縁部内面の回転ナデの先後関係は直接的には明確にできないが、小皿の器面調整（回転ナデ）に先行する工程としては内面の糸切りという作業は想定し難い。したがって、1075の製作に先行する別の工程に伴う痕跡と捉えるのが、最も妥当であろう。つまり見込みの糸切り痕は、別個体の小皿の底部切り離しに伴う糸切りである可能性が高く、粘土円柱から連続的に小皿を製作していく「円柱作り」を示していると考えられるのである。見込みの糸切り痕が先行して切り離された小皿底部であるとすれば、形態的特徴の①～③は説明可能である。

想定される製作工程 上記した成形・調整痕跡の重複状況を踏まえ、製作工程を想定する（第452図）。まず、ロクロ上の粘土円柱上面の外縁に近い部位を回転を利用して押圧しながら輪状に窪ませる（工程1）。次いで窪みの外側を挽き上げて口縁部を成形する。口縁部内外面の回転ナデは、この際の器面調



第451図 土師質土器皿C II形式の技法的特徴



第452図 土師質土器皿C II 形式の制作工程の復元

整として生じる（工程2）。窪みの内側を外側に向かって回転ナデ調整して、盛り上がった部分を潰す。見込みの回転ナデは、この工程の器面調整と考えられる（工程3）。底部に回転糸切りを施して粘土円柱から切り離す（工程4）。

上記した工程1～4を連続的に繰り返して、小皿を量産していく。見込みの糸切り痕は、工程3のナデの範囲が狭く、かつ弱く施される（作業の省力化）ことによって遺存する場合が生じると考えられる。逆に工程3を見込み全面に強く行うと、相対的な盛り上がりが完全に潰され、平坦に窪んだ見込みが形成されるのであろう。因みに陶芸用の回転台を使用して工程1～4を繰り返してみたが、1個体の製作に要したのは平均しても30秒以内であった。

(3) 杯の製作技法

成形・調整痕の特徴 杯E III

形式の形態的なバリエーションは、中間的な形態のものも含めると、かなり豊富である（第453図）。このような形態差を超えて、技法的には共通した在り方を示すようである。これを踏まえ、器面の遺存状態が比較的良好な361・987を検討対象とする。

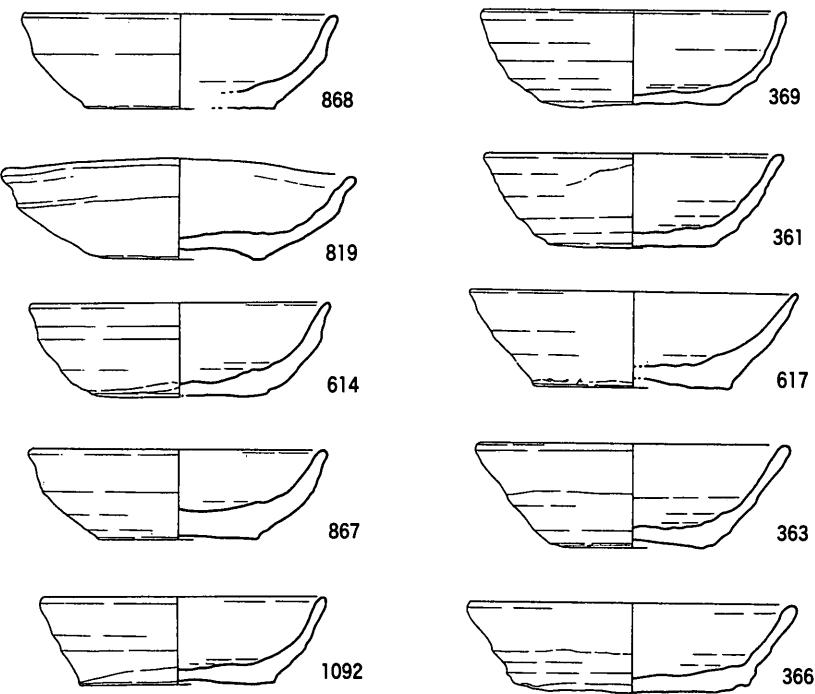
第454図に示したように、器面調整である口縁部の回転ナデと体部の回転ナデには、明瞭な断絶を見出すことができる。口縁部ナデの下端部は、体部ナデによる粘土のはみ出しによって覆われており、口縁部ナデ→体部ナデという先後関係が認めら

れるのである。形態差を超えて、このナデの順序は共通している。つまり、先行して口縁部付近の調整を行い、その後に体部調整を行っているのである。体部ナデは3～4段施されるが、下半2段分は特に顕著な凹凸のロクロ目が認められる。また、361・987の2個体では、体部ナデは上側が後出しており、底部側から口縁部側に（つまり下から上へ）ナデが進行したものと考えられる。口縁部ナデの下端は確定的ではなく、本来は体部下端から口縁部まで施されていた可能性も否定できない。この可能性に立てば、体部ナデは仕上げの2次調整ということになる。

なお、回転ナデによる仕上がりの質感は、杯D II形式（ヘラ切り底）よりも著しく粗雑であり、器面の平滑さに乏しいのが特徴である。また器壁も杯D II形式よりも厚手の傾向にある。つまり、厚手で雑な仕上がりという印象を受ける。

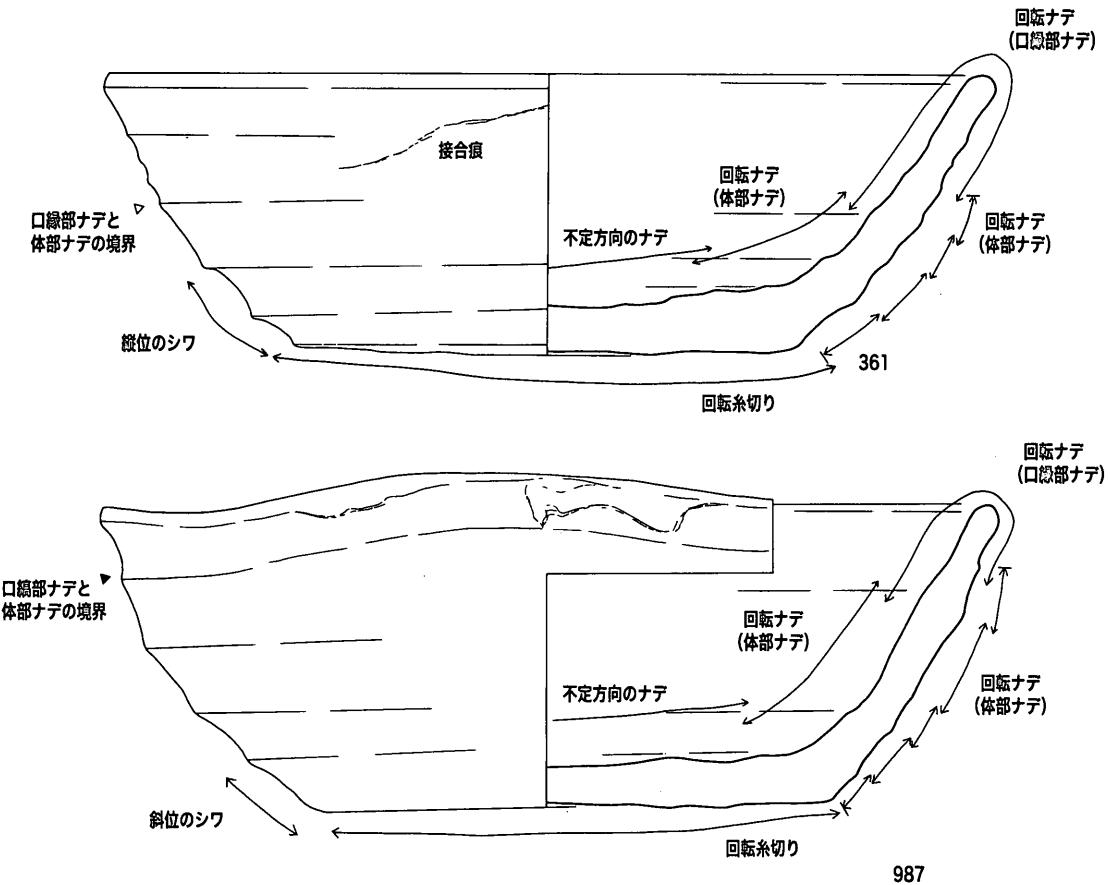
成形段階は、粘土紐巻き上げによるのか、小皿のように粘土円柱の水挽きによるのか、にわかに判定することは難しい。水挽きと仮定して試みたが、製作は不可能ではなかった。ただし361には、接合痕とみられる横位（右上がり）の痕跡が認められることから、前者の可能性を考慮しておきたい。

また361・987の体部下端には、回転ナデの擦痕を歪ませる斜位の細かな皺が観察できる。回転ナデが先行することは明確であり、おそらく底部糸切りに伴い生じた痕跡と考えられる。987は口縁部・体部ナデの後にナデを潰すように口縁部が歪んでいる。糸切り後に器体をロクロから外す際に歪んだ可能性があり、成形・調整・切り離しが粘土の乾燥が進まない短時間のうちに行われたことを示唆する。



第453図 土師質土器杯E III形式のバリエーション

想定される製作工程 以上の観察から、製作工程を想定する。粘土紐を巻き上げて概形を作る（工程1）。口縁部（～体部？）を回転ナデ調整し端部を整える（工程2）。底部から口縁部に向かって器面を



第454図 土師質土器杯E III形式の技法的特徴

強く押さえ付けて回転ナデを行う（工程3）。ロクロから切り離す（工程4）。見込みを不定方向にナデ調整する（工程5）。

3. 分布と編年の位置付け

(1) 分布

13世紀代の土器群の中に、皿C II形式・杯E III形式がどの程度存在するだろうか。形態の峻別が容易な杯E形式の有無でみると、周辺遺跡（六条・上所遺跡、東山崎・水田遺跡、前田東・中村遺跡、多肥・宮尻遺跡、太田下・須川遺跡）では見出すことができない。

空港跡地遺跡においても、糸切り底の皿・杯が普遍的に認められるわけではない。F地区周辺のE・J地区では、報告資料による限り皿C II形式・杯E III形式を見出すことができない。また、C・I地区では皿C II形式と杯E III形式が認められるが、極めて少量にとどまる。F地区において最もこの2器種が多量に認められるのは区画1であり、各部での量的比率は第13表（第5章第4節参照）に示したように中心区画（区画1-a）ないしその正面の出入り口（陸橋部）付近ほど比率が高く、周辺ほど低い傾向が読み取れるようである。杯E III形式では特にその傾向が著しく、土師質土器供膳器種に占める比率は、区画1の中心部のS D fl8・19と区画1正面（南面）のS D fl6南辺部で50%台、区画1の西

外縁で区画2に接したS D f16西辺部で31.31%と大きな開きが認められる。破片数をみてもわかることであるが、区画1の中心部（区画1-a）に近いほど供膳器種が増加する主な原因是、糸切り製品の多量化にあり、中心区画と糸切り底の小皿・杯との結び付きが明確に指摘できるのである。

以上のように、皿C II形式と杯E III形式を土師質土器の供膳器種として主体的に用いる地域は、高松平野中央～南部全体としてみてもほぼ1町単位の範囲（区画1）に限られており、その周辺部（空港跡地遺跡I地区）で少量認められ、さらにその外側の周辺遺跡では杯E III形式に関しては皆無という分布状況にある。

(2) 編年の位置付け

共伴遺物からは、皿C II形式・杯E III形式は中世II-3・4期に位置付けられる。中世II-2期や中世II-5期の土器群中には、これらの存在を認めることができず、13世紀第2四半期～第4四半期（末葉を含まない）に盛行した土器であることがわかる。

第453図で示したような漸移的な形態のため、時期別の形態変化については必ずしも明確ではないが、S D f19（中世II-3期）とS T f02（中世II-4期）の出土土器群で比較すると、口径は前者で10.5～13.8cm、後者で10.6～13.8cmであり、法量分布の幅は変わらない。ただし、前者の多くが11cm台以上であること、後者の大半が10.6～10.8cmに集中することから、縮小化傾向は認めてよいと考える。また形態的には、口縁部と体部の境が強く屈曲する一群が前者では存在するが、後者では存在しないという違いが指摘できる。つまり、形態・法量の著しい個体差は中世II-3期での現象であり、中世II-4期には比較的まとまるようになるといえよう。

4. 系譜

(1) 糸切り技法の採用

かつて片桐孝浩氏は13世紀代の讃岐地方を、ヘラ切り地域（丸亀・坂出・国分寺平野、高松平野西部）とヘラ切り・糸切り共存地域（三豊平野・丸亀平野西部、高松平野東部以東）に大別した（片桐1992）。その根拠の一端に空港跡地遺跡での状況があったのだが、少なくとも高松平野においては、片桐氏の地域区分はより限定された局所的な現象とみた方がよい。

ただ、小皿・杯底部の糸切り技法そのものは、先行して高松平野南部においても中世II-2期（13世紀第1四半期）には採用されている。東山崎・水田遺跡E区S D 03出土土器では、既に第5章第1節で記述したようにヘラ切り底と共に通した形態をもつ糸切り底の小皿・杯がみられる（第413図4・5・14～16・18～20）。また、空港跡地S D f16出土土器（III-2区部分：第92図）でも、糸切り底の小皿（303・304）と杯（314）が存在し、小皿はヘラ切りの皿B III形式と同一形態である。これらの土器群では、ヘラ切りと糸切りでは形態的な近縁関係のみならず、肉眼観察では胎土も共通しており識別が難しい。つまり糸切り技法は、新たな形態と結び付いて採用されるのではなく、既存のヘラ切り製品の底部切り離し技法の一部として出現するとみた方がよいようである。その点で特定の胎土・形態・成形技法と結び付く杯E III形式とは異なるし、杯E III形式の祖形と捉えることはできない。

(2) 周辺地域との比較

では周辺地域において、特徴的な杯E III形式に近似した事例を見出すことは可能であろうか。既報告資料による限り、三豊平野、阿波（吉野川下流域）、伊予（松山平野）、土佐、備前・備中・備後南部、安芸、播磨、摂津（西摂）などの地域では、杯E III形式に近い形態をもつ糸切り杯は存在しない。

ただし地域を問わなければ、近似事例は存在する。相模の土師質土器皿（服部実喜氏分類I群1類）は、外傾する体部から屈曲ないし内弯して直立・外反する口縁部をもち、第453図868・819・614・867に似た形態・法量である。特に鎌倉では、服部氏編年（服部1992）I b期～II c期（12世紀第4四半期～13世紀第2四半期）にI群1類が盛行するようであり、屈曲する口縁部を伴う杯E III形式がみられる中世II－3期（13世紀第2四半期～第3四半期）と一部重複する。

資料を実見していないために、鎌倉地域の土師質土器皿との細かな異同についてはまだ整理できていない。しかし、杯E III形式と共に胎土をもつ手捏ねの杯（杯F形式）が、やはり周辺地域や京都などの皿形製品との系譜関係を見出しえず、服部氏分類のII群4に近いことと併せ、今後検討すべき課題といえよう。

5. 想定される生産・流通形態

現状での資料による限り、杯E III形式・皿C II形式は先行する土師質土器との系譜関係をもたずに出現し、空港跡地遺跡ことに居館の区画1との限定された需給関係を前提に量産されたようにみえる。中世手工業生産の一般的な在り方としては、少量の貢納品生産と民需のための大量生産が想定されており、杯E III・皿C II形式にみられる極端な偏在傾向は明らかに異質である。また技術的には、杯の「口縁部→体部ナデ手法」や、皿の円柱作りといった特徴的な技法は共有するものの、器面の最終的な平滑化を図らない粗雑な仕上げ状況や、出現当初（中世II－3期）の著しい形態・法量差は、ヘラ切り底の杯D II形式の均質的な状況とは異なり、技法的まとまりの欠如と評価できる。少なくとも西村遺跡のような、技術的に熟達・安定した専業集団による製作ではない可能性が出てくる。また逆に専業集団であれば、上記のような限定された供給対象のみに拠って立つことは困難であろう。

これに関連して注目されるのが、この器種にしばしば認められる糊圧痕である。出現率を算出していないが、同等量程度存在する杯D II・皿B III形式では時期の下るII－5期の事例（1286）を例外として期糊圧痕が皆無であるのに対して、杯E III形式で2点、皿C II形式で3点確認できた。糊圧痕を観察すると、脱穀以前の状態で胎土中に混入し、そのまま焼成されたとみられるもののみであり、糊殻としての圧痕はない。したがって想定される混入の場としては、①粘土の採掘場か②土器製作の場の何れかが考えられる。①であれば、採掘場が水田で落ち穂が発芽する以前に混入したかたちで粘土採掘が行われることになる。また②であれば、糊の混入し易い場所で土器製作が行われていたことを示す。混入し易い場所としては、a. 直近に糊の状態での米の貯蔵施設が存在する場所か、あるいはb. 収穫後の作業場と土器製作の場が兼用されていた場所が考えられる。いずれのケースが妥当かはわからないが、胎土と形式との強い結び付きが指摘できるので、①も土器生産集団の問題として捉えられる。また①・②bは農閑期の作業を想定してよからう。

不確定な憶測ではあるが、杯E III・皿C II形式の製作者に、農閑期の操業を主体とした非專業的な集団を擬することができる可能性を提示しておきたい。それでは、居館（区画1）をほとんど唯一の対象とした需給関係の成立基盤は何であろうか。第3節で検討したように、区画1での建物配置は一定程度の「公」を体現するものであり、そこでの土師質土器供膳具の使用・廃棄は村落構成員の紐帯と支配関係を確認する居館での年中行事において行われた可能性はあろう。そのような「公の場」において消費される物品の調達を、土器製造には不慣れな村落構成員の労働力の提供によって賄っていたとみることはできないだろうか。

6. おわりに

土師質土器杯E III・皿C II形式の極端な偏在傾向を議論の出発点として、やや特異な限定的な生産・流通形態として捉え、検討した。当然のことながら、この器種の類例の蓄積を待って厳しく検証されるべき内容を多々含んでいるため、いまここで結論の提示にまでは至らない。またそのような特異性を際立たせる一般的（とイメージされている）な土器の流通形態についても、十瓶山・西村産製品と他者では異なった状況が考えられる。今後、具体的な土器の系統認識に基づいた、様々な流通レベルの一環として位置付ける作業を行っていきたい。